

隣り合う景色の違いが 絵に作用する



cap『echo location』2016、
130cm×380cm、キャンバス、油彩

Q: 洞窟の作品「echo location」について話してもらえますか。

下山：「echo location」は実際にラオスの洞窟に行った経験から作った作品です。観光地ではない未開の洞窟で、真っ暗な空間をヘッドライト一個で先導され入りました。ホールのような開けた空間に到着したとき、ライトを消すと、終わりが見えないような状況に思えました。視覚は頼りにならない代わりに、何かに包まれているような、何かの生き物の中にいるような感触がありました。20歳くらいの経験だったんですが、そういう感触みたいなものに近づこうとするということが制作の原動力になり空間の内部を手で探っていくような感覚で制作していました。何かに包まれている感触は心地良くも怖くもあり、それをきっかけに作品が作れないか考えていました。

Q: 木枠からキャンバスを外して描いている理由を教えてください。

下山：洞窟の中にいるような感覚によって、何かに生かされているようなことを悟ったり、あらゆるものが関係しながらバランスを保つようなことを考えて制作していましたがテーマが壮大になりすぎてもう少し身近な手触りを描きたいと考えていました。同じ頃に17年住んでいた実家を解体しました。家の物を捨てて空にした時に、自分の近くに残した物は布地や洋服などや、残しておきたい本などでした。布や紙などを移動できる状態に保つことが必要だった経験から、自分が把握できる物を移動できる状態に保ち、自分の生活に合った形態を制作にも反映させ、キャンバスを木枠に張らずに描くことにしました。



下山 健太郎

薄くて丸められることが重要で、木枠から外した作品を持ち運び、気になった場所に設置し、写っていない景色も含めて場所や光がどういう状態なのかを考えながら、写真撮影や野外での展示をしています。キャンバスには下地を塗っていないので、どんどん絵の具が染み込み、木枠に張られていないので描こうとすれば揺れるし、コントロールが効かない部分が多く、丸めてしまうことで絵は完璧に再現されず、見え方すら一定に留められない。そのようなイレギュラーに起きる事を受け入れて反応して判断しています。立体作品も制作していますが、場所のスケールに対して物を配置して空間を探り、景色を変えていくことを考えながら、絵画との関係性のなかで展示しています。制作過程でも例えば絵を複数重ねてみたり、スタジオの中でも色のあるものを絵に近づけてみたり、石を床に置いてみたり、そういうちょっとした意識や隣り合う景色の違いが絵にどう作用しているのかを外側から眺め確かめながら制作しています。

1990年 東京都生まれ。東京在住。

2014年 東京造形大学 造形学部 美術学科 絵画専攻領域 卒業、

2016年 東京造形大学大学院 美術研究領域 修了。

近年の主な個展に「seeing far away」(BRAVENESS CONTEMPORARY、神奈川、2017)、グループ展に「朝飲んだ水、濁り泡立つ川と透き通った黄金のおしっこ。乾いた堅い毛に跨がる夕方、砂の上では土亀がすべる」(西郷山公園、東京、2018)、「CU-SeeMe vol.1」(CSギャラリー、東京、2018)、「rgb + vol.9」(zokeiギャラリー、東京、2017)、「rgb + vol.8」(zokeiギャラリー、東京、2016)、「夏の採光」(木島平村中町展示館、長野、2016)、「跳ねる土」(HIGURE17-15cas、東京、2014)、「turner museum vol.1」(ターナーギャラリー、東京、2012)、「KIRITUMA」(キリツマ、東京、2011)、「猿の絵」(ギャラリー石、東京、2010)等。

レジデンスに「アーティストインレジデンス木島平」(長野、2016)

shimoyamakentaro.com